

新しい視点からの神話教育

平藤喜久子(國學院大學)

現在の日本において、若者たちが神話に触れる機会は決して少なくない。マンガ、アニメ、コンピューターゲームの作品には、神話から着想を得たものや、神々が登場する作品は数多くある。その中には世界のさまざまな宗教や神話を取り混ぜているものもある。こうした作品を通し、神話に関心を持つ人々も増加していると感じられる。

しかし、学校教育ではどうかというと初等、中等教育で神話を教える授業はほとんどない。日本神話についても基本的には学校で教えられることはなかった。その理由の一つとしては、かつて日本において神話が国民のナショナリズムを昂揚するものとして学校で教えられており、そのため戦時体制を支えたもののひとつとみなされたということが挙げられる。そして戦後、教育の場から神話は取り去られた。神話は、日本の学校教育のなかでタブーとなったのである。

その状況が、いま変わろうとしている。2006年の教育基本法の改正では、宗教教育について、第一項が「宗教に関する寛容の態度、宗教に関する一般的な教養及び宗教の社会生活における地位は、教育上尊重されなければならない。」となった。このなかに新たに加わった「宗教に関する一般的な教養」には当然、「神話」も含まれるといえよう。そして2007年の学習指導要領改正では、小学校第一学年、第二学年の「国語」について、「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。」という一文が加わった。小学校低学年の国語の授業のなかで日本の神話を教えることが定められた。今までタブーとされていた神話教育が復活することになったのである。大学教育においても、宗教文化教育を実質化し、より多くの人々に宗教文化について学んでもらえるようにしようという取り組みがすでにはじまっている。

こうした状況から、今、日本における神話教育は岐路にたっているといえるだろう。しかし、何を教えるのか、どのように教えるのかということについての議論はほとんどなされていないようである。

今回の発表では、はじめに日本における神話教育の状況を紹介する。そしてとくに大学生を対象とした宗教文化教育のなかで神話を扱う場合、どのような視点から、何を教えることが求められているのかという問題について私見を述べることにしたい。